

サッカーに関する社会学的研究の動向

——邦文・英文論文を対象にして——

杉山 進

Trends of Studies in Sport Sociology on Soccer

Susumu Sugiyama

Abstract

In this paper the present author tried to clarify the research trends in sport sociology whose main theme was soccer. Materials used were the total of 32 original papers, in which 19 papers were written in Japanese and 13 were in English. Each paper was examined and analyzed in terms of its objects observed, general method applied, area of concerns in sociological study, specific technique used and groups observed. Following trends were said to be observable.

1. In the Japanese papers it was found that most of the studies approached to their objects in term of social psychology using questionnaires and that more than half of them treated groups of players.

2. In the English language papers it was a distinguished feature that four out of 13 papers applied historical approach, analyzed the relationship between soccer and society/culture, and used historical documents as their source materials.

3. In general, it could be said that present sociological studies on soccer might not yet be on a theory-making stage but still on a data-collecting one; this was especially true in Japan.

Year	Author	Title	Language
1970
1971
1972
1973
1974
1975
1976
1977
1978
1979
1980
1981
1982
1983
1984
1985
1986
1987
1988
1989
1990
1991
1992
1993
1994
1995
1996
1997
1998
1999
2000

サッカーに関する社会学的研究の動向 —邦文・英文論文を対象にして—

I. 目 的

体育社会学あるいはスポーツ社会学における研究動向についての論文や報告には、「体育における社会学的研究の動向¹⁾」、「体育社会学専門分科会の研究動向²⁾」、「体育社会学研究の20年³⁾」、「スポーツ社会学の研究系譜⁴⁾」、「The Sociological Research Work of Sport in Japan⁵⁾」、「Past, Present and Future Perspectives for Research in Sport Sociology⁶⁾」がある。しかし、個別スポーツ種目に関する社会学的な研究動向についての研究はみられない。

本稿での研究目的は、邦文論文と英文論文を対象に、サッカーに関する社会学的研究を整理し、研究の動向を明らかにすることである。

このような研究は、研究の性格上実践的目標を伴うが、ここでのそれは、日本での今後のサッカーに関する社会学的研究の発展に役立てたいとの願いをもつものである。さらに、この実践的目

標の意義、つまり、特定スポーツ種目の社会学的研究の発展にはどのような意義があるのかについては、次のことだけを述べておく。本研究では、サッカーを取り上げたが、ある特定のスポーツ種目に関する社会学的研究の発展は、そのスポーツの社会学的性格、例えば、サッカーによる個人の社会化の特性、サッカーと文化・社会との関連特性、サッカー集団の機能特性などを明らかにすることになるであろうということである。しかし、そのためには、当然他種目との比較検討が必要であり、今後の研究課題でもある。(以後、邦文論文は和論文、英文論文は英論文に各々略す。)

II. 方 法

なんらかの方法でサッカーを扱った社会学的な研究論文を収集し、1. 出典別、2. 研究対象別、3. 研究領域別、4. 研究方法と調査技術別、4. 調査対象者別に分類して表に示し、和論文と英論文を比較しながら研究動向を考察した。

論文収集は次の手順で行なった。

1. 論文検索の対象文献として、体育学研究、日

表1. 論文検索の対象論文

文 献	発 行 機 関	号、巻、回大会	年 度	備 考
体育学研究	日本体育学会	1-26	1951-81	
日本体育学会大会号	日本体育学会大会主催機関	22-33	1971-82	
紀 要	東京大学教養学部	1-16	1960-82	
	東京学芸大学	21-34	1970-82	脱, 30
	東京教育大学	9-16	1970-77	
	筑波大学	1-5	1978-82	
	群馬大学教育学部	9-17	1978-81	
	日本体育大学	6-8	1977-79	
	日本大学文理学部	12-16	1978-82	
	早稲田大学	2-14	1970-82	
	国学院大学	5-14	1973-82	
	東京女子体育大学	2-17	1967-82	脱, 4, 5
	順天堂大学	2-16, 24	1959-73, 81	脱, 3, 4, 5, 8, 14
	慶応義塾大学	13-21	1973-81	
	国士館大学	2-8	1975-82	
	東海大学	5-11	1973-82	脱, 4, 7
	専修大学	1-6	1971-79	
	静岡大学教養部		1977-81	
	中京大学	6-23	1964-82	脱, 7, 10, 12
	京都教育大学	8-12	1973-78	
	大阪体育大学	1-13	1969-82	
	奈良教育大学	22-31	1973-82	
天理大学		1973-82	脱, 74	
徳島大学教養学部	7-15	1973-82		
愛媛大学教育学部	4-5	1980-82		
福岡大学	1-8, 23, 24	1970-74, 82		
I. R. S. S.	I. C. S. S.	2-14	1967-79	
Sport DOKUMENTATION	Bundesinstitut für Sportwissenschaft, Köln		1975-82	英論文のみ収集対象

本体育学会大会号, 各研究機関発行の紀要, International Review of Sport Sociology (以後, I.R.S.S. に略す), Sport DOCUMENTATION を選定した。

2. 各文献に掲載されている論文の中から, 表題に「サッカー」あるいは「フットボール」の見出しのある論文で, 且つ社会学的研究論文であるもののみを収集した。

3. 表題には「サッカー」あるいは「フットボール」の見出しがない論文でも, 内容において, サッカーを扱った社会学的研究論文をも加えて収集した。

4. 収集された論文が参考あるいは引用している論文を, 2と3に照らして収集した。

5. 内容からサッカー以外のフットボールに関する研究論文は除き, 同一の研究論文と思われるものについては一編のみ取り上げた。

収集された論文, つまり本研究においては研究の対象となる論文を発行あるいは発表年度順に, それらの概要とともに以下に掲げておいた。論文数は, 和論文19, 英論文13, 合計32であった。以後, 論文は論文記号をもってこれにかえる。

研究対象論文とその概要

和論文

論文

記号

イ. 竹内京一 : チームワークの分析的研究— チャンスについて—, 体育学研究, 7-1:361, 1963。

チャンスをつくろうとする集団機能はチームワークの一つの機能であるとの前提から, チャンスとはどのようなものかを選手の位置関係から求めようとした実験的研究。

ロ. 井田国敬 : “強い” 運動部集団の機能的特性について— 高校サッカー部の事例研究—, 体育学研究, 11-5:55, 1967。

大阪府下の高校サッカー部員を対象に集団の凝集性と凝集性を高める条件について調査した研究。

ハ. 竹内京一 : 集団の大きさの変化による集団機能の変容について— 集団の分節と大きさの変化について—, 体育学研究, 13-5:46, 1968。7対7のゲームにおいて, ボールやゴールの位置関係から集団の分節化がどのように生じるかを観察した研究。

ニ. 神文雄ほか : スポーツ集団の現状と問題(第

3報)— サッカー集団—, 体育学研究, 13-5:47, 1969。

広島県サッカーリーグ加盟チームを対象に, チームの沿革, 大会参加, コーチ, 経費についてスポーツ集団の現状を調査した研究。

ホ. 三輪守男・清水勝行 : サッカー競技に関する考察, 天理大学学報, 61:114-129, 1969。大学の運動クラブ員を対象に, クラブやスポーツに対する問題意識を調査した研究。

ヘ. 田中純二ほか : サッカー. スポーツ少年団に関する調査研究(その1), 体育学研究, 14-5:308, 1970。

全国サッカースポーツ少年団大会出場チームの選手を対象に, サッカー開始年令, 入部の動機, 入会に対する両親の賛否, 指導者, 練習, 怪我等についての調査研究。

ト. 赤井岩男ほか : 中学校サッカー選手についての研究, (1)意識・態度について, 日本体育学会第22回大会号:470, 1971。

概要はヌの項を参照。

チ. 赤井岩男ほか : 中学校サッカー選手についての研究(Ⅱ) (1)意識態度について, 日本体育学会第23回大会号:404, 1972。

概要はヌの項を参照。

リ. 萩原武久 : 少年サッカースクールの実態について(第1報)— 親と子の参加の意識について—, 大阪教育大学紀要, 第22巻:173-180, 1973。

サッカースクールの管理者, 加入者と保護者を対象に, 参加の動機を身体性, 活動性, 意志性, 社会性, 情緒性に関する項目から調査を行った研究。

ヌ. 堀口正弘ほか : 中学校サッカー選手についての研究— 意識・態度について—, 日本体育学会第25回大会号:444, 1974。

全国中学生大会出場チームの選手を対象に, サッカー開始年令, サッカーと勉強の両立, サッカー関心度, 練習日数, 希望ポジション, 動機, 選手としての将来の目標, 技術の自己診断についての調査研究。

ル. 細木磐ほか : 社会人のスポーツクラブ存立要因に関する分析的研究, 大阪体育大学紀要, 7:43-51, 1975。

京都の社会人のサッカークラブを対象に, クラブの発足・母体・メンバー数・活動内容, 指導者, クラブ発展の要件, 予想される解散原因に

- について調査し、クラブを存立させている要因を明らかにしようとした研究。
- ラ. 笹本健ほか : 西ドイツにおける Fussballtrainer System, 日本体育学会第27回大会号 : 472, 1976。
現在の西独のトレーナー制度についての調査研究。
- ワ. 大串哲朗ほか : 全国高校サッカー大会にみる地域性に関する一考察, 上智大学体育, 11 : 62-74, 1977。
概要はレの項を参照。
- カ. 萩原武久 : 少年サッカースクールの実態について (第2報) - 参加後の変化について -, 大阪教育大学紀要, 26 : 13-21, 1977。
サッカースクール加入者と保護者を対象に, 参加後の意識の変化を, リと同様の項目から調査した研究。
- コ. 大串哲朗ほか : サッカー指導者に関する研究, 日本体育学会第28回大会号 : 524, 1977。
全国大会出場チーム (小・中・高) の指導者とレベルの低い地域の指導者を対象に, 年齢, サッカー歴, 指導歴, 資格, 指導の問題点について調査し比較した研究。
- ク. 富岡義雄ほか : ヤングフットボーラーに対する実態調査 - サッカーに対する意識について -, 東京経済大学人文自然科学論集, 49 : 139-159, 1978。
全国大会出場チーム (小・中・高) の選手を対象に, ト, チ, ヌと同様の調査項目に, さらにサッカーに関する知識, 身についた事柄, 傷害等の項目を加えて調査した研究。
- ケ. 岩村英吉 : 全国中学生サッカー大会の成績にみられる地域格差に関する研究, 順天堂大学体育研究科修士論文, 1978。
全国大会で成績のよかったチームとそうでなかったチームを対象に, 指導, 練習, 経費, 対外試合等に関する調査を行ない, チームを取りまく社会的環境の地域性を明らかにしようとした研究。ワは全国高校サッカー大会出場チームを, レは全国中学生サッカー大会出場チームを各々対象にしている。
- コ. 小宮喜久ほか : 中学生サッカー選手のサッカーに対する意識及びその進路, 順天堂大学保健体育紀要, 24 : 12-20, 1981。
過去に全国中学生大会に出場したことのある選手を対象に, 卒業後の進路, サッカー歴, 将来

の目標, サッカー継続・不継続の理由, 進学・就職とサッカー等についての追跡調査を行ない, 選手の動向と大会の果たした役割と問題点を考察した研究。

- ツ. 真栄城勉・田中純二・笹本良司 : 少年サッカーに関する研究 (第1報) - 少年サッカー活動についての両親の意識 -, 愛媛大学教育学部保健体育学教室論集, 5 : 37-50, 1982。
愛媛県の少年サッカースクール, サッカースポーツ少年団の団員の両親を対象に, 練習, 指導, 費用, 子供への期待, サッカー活動後の子供の変化について調査した研究。

論文 英論文

記号

- a. Cikler, J. : The Rise, the Development and the Extinction of Soccer Team of Boys, I.R.S.S., 2 : 33-46, 1967。
同じチームの10~13才の少年を対象に, 約2年間, サッカーの練習場・試合, 学校などでメンバーの友好と敵対について観察した研究。
- b. Mihovilovi, M. A. : The Status of Former Sportmen, I.R.S.S., 3 : 73-93, 1968。
引退選手を対象に, 引退理由, 引退の仕方, 引退後の行動, 周囲の人々の態度, 引退をスムーズにする方策等に関する調査研究。
- c. Heinila, K. : Football at the Crossroads, I.R.S.S., 4 : 5-30, 1969。
フットボールを社会体系 (ルールと規範に支えられた) として捉え, その仮説が, 現在のフットボールの状況をよりよく理解するのに役立つことを証明した研究, 将来のプロとアマチュアの両極化についても予測をしている。
- d. Talaga, J. : An Attempt to Define the Social Position of Football Instructors and Coaches in Poland, I.R.S.S., 6 : 125-152, 1971。
ポーランドのコーチ, スポーツリーダー選手を対象に, コーチの競技歴・転向理由, 仕事等について調査を行ない, コーチの社会的地位を明らかにしようとした研究。
- e. Elias, N. and Dunning, E. : Folk Football in Medieval and Early Modern Britain, in Dunning E., Sociology of Sport, Frank Cass & Co. LTD, 1971 : 116-132。
イギリスで行なわれていた中世の民衆フットボールについて, フットボールのにない手で

あった民衆の宗教, 思想, 生活心情からフットボールの魅力や継承された理由について考察した文献研究。

- f. Dunning, E. : The Development of Modern Football, in Dunning, E., *Sociology of Sport*, 1971 : 133-151.

フットボールの発展段階 (パブリックスクールでの教育手段としてのフットボール ルールの明文化から統一へ フットボールの普及) を, その背景であるイギリスの階級性や近代化に伴う社会変動から考察した研究。

- g. Elias, N. and Dunning, E. : Dynamics of Sport Groups with Special Reference to Football, in Dunning, E., *Sociology of Sport*, 1971 : 66-80. Reprinted from *The British Journal of Sociology*, Vol. 17, No. 4, 1966.

サッカーのゲームに小集団理論を適用したものであるが, 研究の意図は, 新たな理論の必要性をサッカーのゲームの分析から論じたところにある。特に, 中心概念である tension-balance の特性や, ルールとの関係について論じている。

- h. Lever, J. : Soccer in Brazil, in Talami, J. T. and Page, C. H., *Sport and Society*, Little, Brown and Company, Boston, 1973 : 140-55. From *Trans-action*, December 1969 : 36-43 ; original title, Soccer : Opium of the Brazilian People.

ブラジルの地方クラブと大都市クラブについて, 活動内容, 経営, 施設, 入金制度, 会員数, プロ選手の技術・報酬・管理・補充に関する調査をもとに比較し, クラブのプロ化によるブラジルサッカーの発展過程 (地方クラブ→大都市クラブ→アメリカのプロ) を考察した研究。

- i. Clignet, R. and Stark, M. : Modernization and the Game of Soccer in Cameroun, *I.R.S.S.*, 3-4 (9) : 81-98, 1974.

社会経済的, 文化的特性とスポーツ活動の対応をカメルーンを例にとりて考察した事例研究。植民地政策から近代化への政治, 経済, 制度, 教育の発展が, サッカー (選手, 観客, クラブ関係者) にどのように影響し, また逆に影響されたかを考察している。

- j. Taylor, I. : Spectator Violence around Football - The rise and fall of the "working class weekend" -, *Research Papers in Physical Education*, 3 (2) : 4-9, 1976.

イギリスの若者労働者のレジャーの過ごし方を, 歴史的 (彼らの社会的環境, 特に階級性について) に考察することによって, 今後の彼らのレジャーの過ごし方, そしてフットボール熱の将来に解釈を試みた研究。

- k. Roadburg, A. : Is Professional Football a Profession? *I.R.S.S.*, 3 (11) : 27-37, 1976. スコットランドの一部リーグに加盟しているチームの選手を対象に, 選手が自分達の職業をどのような意味でプロフェッショナルと考えているかについて調査した研究。

- l. Gowling, A. : The Occupation of a Professional Football, *Momentum*, 2 (2) : 12-18, 1977.

観察によって, プロ選手の仕事観をつくりあげている考え方 (幸運, スキル, 自信, 体力, 性格に関する) を考察した研究。

- m. Boothly, J. and Tungatt, M. F. : Amatear Sports Club ; Their Salient Feature and Major Advantages, *I.R.S.S.*, 4 (13) : 25-36, 1978.

イギリス Cleveland のアマチュアスポーツクラブについて, クラブ紹介者, クラブまでの距離, メンバーの年齢・職業・他種目の実施度の調査を行ない, アマチュアクラブの特性とスポーツ普及に関してクラブのもつ意義について考察した研究。

考 察

1. 出典

表2は、収集された論文を出典別、発行あるいは

表2. 出典別分類

出 典	論 文	発 行 機 関	号、巻、回大会	年 度
体 育 学 研 究	イ	日 本 体 育 学 会	Vol. 7-1	1963
	ロ	〃	〃 11-5	'67
	ハ	〃	〃 13-5	'68
	ニ	〃	〃 13-5	'69
	ヘ	〃	〃 14-5	'70
日 本 体 育 学 会 大 会 号	ト	日 本 体 育 大 学	22回大会	'71
	チ	福 岡 大 学	23 〃	'72
	ヌ	東 京 工 業 大 学	25 〃	'74
	ヲ	東 北 大 学	27 〃	'76
	ヨ	山 梨 大 学	28 〃	'77
天 理 大 学 学 報	ホ	天 理 大 学	61号	'69
大 阪 教 育 大 学 紀 要	リ	大 阪 教 育 大 学	22巻	'73
	カ	〃	26〃	'77
大 阪 体 育 大 学 紀 要	ル	大 阪 体 育 大 学	Vol. 7	'75
上 智 大 学 体 育	ワ	上 智 大 学	〃 11	'77
東 京 経 済 大 学 人 文 自 然 科 学 論 集	タ	東 京 経 済 大 学	49号	'78
順 天 堂 大 学 保 健 体 育 紀 要	ソ	順 天 堂 大 学	24号	'81
愛 媛 大 学 教 育 学 部 保 健 体 育 学 教 室 論 集	ツ	愛 媛 大 学	5号	'82
順 天 堂 大 学 体 育 研 究 科 修 士 論 文	レ			'78
I. R. S. S.	a	I. C. S. S.	Vol. 2	'67
	b	〃	〃 3	'68
	c	〃	〃 4	'69
	d	〃	〃 6	'71
	i	〃	〃 9, 3-4	'74
	k	〃	〃 11, 3	'76
	m	〃	〃 13, 4	'78
Sociology of Sport	e	Frank Cass & Co. LTD		'71
	f	〃		'71
	g	〃		('66), '71
Sport and Society	h	Little Brown and Company		('69), '73
Research Papers in Physical Education	j		Vol. 2, 3	'76
Momentum	l		Vol. 2, 2	'77

和論文の出典では、体育学研究と日本体育学会大会号から5編ずつ、紀要から8編、そのほか修士論文から1編あった。しかし、体育学研究に掲載された論文はすべて日本体育学会発表抄録であるから、日本体育学会発表抄録が10編という結果であった。また、論文検索の対象文献以外の出典による論文数は、和論文で6、英論文で6、合計12あった。

発行あるいは発表年度からみると、1963年から1982年までに渡っているが、1970年以前の論文はすべて体育学研究掲載論文であった。

英論文の出典では、I.R.S.S. から7編、Sociology of Sport から3編、Sport and Society, Research Papers in Physical Education, Momentum から各々1編ずつあった。I.R.S.S. は、国際スポーツ社会学会、I.C.S.S. (International

は発表年度順に示したものである。収集の範囲を示すとともに本研究の限界を示すものでもある。

Committee for Sociology of Sport) の機関誌である。1966年に annual で発行され、1973年からは quarterly になっている。Sociology of Sport と Sport and Society は論文集である。g, h は転載された論文で、originalの発行年度は、gが1966年、hが1969年であった。

2. 研究対象

研究対象別の論文数は次表のとおりであった。選手を対象にした研究がもっとも多く8、つぎに、クラブ・部と集団が6、指導者とスクールが3であった。

表3 研究対象別分類 (○は重複を示す)

研究対象	和論文	数	年度	英論文	数	年度	計	年度(和英)
サッカークラブ・部	ホ, ル, ワ, レ	4	'69, '75-'78	h. m	2	'69, '78	6	'69, '75-'78
◦ 指導者	ヲ, ヨ	2	'76-'77	d	1	'71	3	'71, '76-'77
◦ 集団	イ, ロ, ハ, ニ	4	'63, '67-'69	a. g	2	'66-'67	6	'63, '66-'69
◦ 少年団	ヘ, ◎	2	'70, '82		0		2	'70, '82
◦ スクール	リ, カ, ◎	3	'73, '77, '82		0		3	'73, '77, '82
◦ 選手	ト, テ, ス, タ, ソ	5	'71-'74 '78, '81	b. k. l	3	'68 '76-'77	8	'68, '71-'74 '76-'78, '81
◦ ファン(観客)		0		j	1	'76	1	'76
◦ のゲームの歴史		0		e. f.	2	'71	2	'71
◦ の伝播普及		0		i	1	'74	1	'74
◦ ルール・規範		0		c	1	'69	1	'69

年度からみると、選手を対象にした研究は '68年から '82年と収集範囲年度の全体にわたっているのに対して、集団を対象にした研究は、'60年代にみられたのみで、'70年以降にはなかった。また、クラブ・部、指導者そしてファン(観客)を対象にした研究は、'69年、'71年と2編あるが、多くは、'75年以降のものであった。東京オリンピック(1964)を契機に発足したサッカー少年団やスクールを対象にした研究は、'70年から '82年にかけて4年くらいの間隔で4編あった。

次に研究者が、1)、学校体育(教育としてのスポーツ)、2)、社会体育(レクリエーションとしてのスポーツ)、3)、プロサッカー(仕事としてのスポーツ)のどの分野に関心をもっているかを、研究対象からみて分類したのが表4である。1)には、学校体育に関連の深い運動部、選手、指導者に関する研究が含まれる。2)には、サッカー少年団やスクール、社会人クラブ、選手に関する研究が含まれる。3)には、プロサッカークラブやプロ選手に関する研究が含まれる。

和論文では、1)に関する論文が、英論文では、3)に関する論文が各々多くみられ、研究者の関心をうかがうことができる。日本ではサッカーを「教育として」扱う傾向が強いが、外国では「仕事として」扱う傾向が強いことが理解される。このことは、日本にはプロサッカーがないこと、外国(イギリス、ブラジル、ユーゴスラビア)では、日本

の課外活動として運動部が存在しないことからみて当然の現象であるといえよう。

和論文についてみると、菅原と影山が体育社会学の研究に関して表4に親似た内容の報告をしている。菅原⁷⁾は、1950-64年までは学校体育に関する研究が多かったが、1965年以後からは、社会体育に関する研究が増えてきていることを報告している。影山⁸⁾は、菅原とは異なった分類をしているが、1960-69年においては社会体育関係の論文数が多いことを指摘している。

しかし、サッカーに関する社会学的研究においては、運動部という学校体育に関連した分野を扱った研究が多く、1969-81年にわたり9編あった。また、このうち、全国大会出場校を対象にした研究が、1971-81年にかけて8編と大部分であった。

3. 研究領域

日本体育学会大会での体育社会学コード表によって研究論文を分類したのが表5である。

論文数からみると、和論文では、動機・意識・態度に関する社会心理的研究が11編と最も多かった。英論文では、サッカーと文化・社会の領域に属する研究が7編と全体の半数以上あった。社会心理的研究は、合計数からみても14/32と最も多く、ついでサッカーと文化・社会の領域が12/32と多かった。

年度からみると、社会心理的研究は、1968-82年と長期にわたっているが、サッカーの構造の領域、特に集団に関する研究は、1969年以前だけで、

表4 研究者の関心分野

関心分野	和論文	数	年度	英論文	数	年度	計	年度(和英)
1) 学校体育	ホ, ト, チ, ス, ソ ワ, ヨ, タ, レ	9	'69-'81.		0		9	'69-'81
2) 社会体育	ニ, ハ, リ, ル カ, ツ	6	'69-'82.	m	1	'78.	7	'69-'82.
3) プロサッカー		0		b. h. k. l	4	'68-'69, '76-'77	4	'68-'69, '76-'77

表5. 研究領域別分類

網	目	和論文	数	年度	英論文	数	年度	計	年度(和英)
サッカーと文化・社会	文化				e				
	社会変動				f, i, j				
	社会成層				d		'68-'71	12	'68-'71
	制度	ヲ	5	'75-'78		7			
	管理・運営・組織	ル					'76		'75-'78
	指導	ヨ							
サッカーの構造	地域社会	ワレ							
	マナー・規範			'63	c				'63
	集団	イハニ	3	'68-'69		1	'66-'69	4	'66-'69
サッカーの社会心理的研究	凝集性	ロ							
	動機・意識・態度	ホヘトチリ ヌカタソツ	11	'69-'82	b, k	3	'68 '76-'77	14	'68-'82
	パーソナリティ				l				

1970年以降みられない。サッカーと文化・社会の領域では、英論文は1968-71年に、和論文は1975-78年に各々発行あるいは発表年度が集中している。

研究の分化という観点からみると、和論文19編あるが、和論文数は英論文数の1.5倍であること、和論文の約6割がひとつの目に集中していることから考えて、外国の研究者の方が日本の研究者よりも関心が分散しており、研究領域の分化の程度が幅広いのではないと思われる。

表6. 研究領域の区分と著書・論文数(菅原による)

研究領域	(全体の論文数)	(日本人研究者の論文数)
I. 体育・スポーツの基礎理論		
1. 総説, 一般, 原理	56	28
2. 研究法	11	7
II. 体育・スポーツ・プレイと文化, 社会		
1. 総説一般, 原理	58	30
2. 文化, 文化圏, 民族, 国家	37	12
3. 文化変容, 社会変動	26	7
4. 社会成層, 社会移動, 人口	17	1
5. 政治, 制度, 行政, 企画管理, 運営, 組織, 施設	47	29
6. 教育, 学校, 指導, 教師, (学校運動部, クラブ→Ⅲ3)	73	47
7. 宗教	10	4
8. 地域社会, 都市, 農村, 家族	50	31
9. 経済, 労働, 職場	25	16
10. マス・コミュニケーション, マス・メディア	15	7
11. レジャー, レクリエーション(地域社会, 都市, 農村, 家族レクリエーション→Ⅱ8)	71	28
III. 体育, スポーツ・プレイの構造		
1. 総説, 一般, 原理	64	39
2. マナー, 規範, 価値	36	28
3. 集団	79	66
4. 大会, 選手	17	12
IV. 体育, スポーツ・プレイの社会心理的研究		
1. 総説, 一般, 原理	10	1
2. モラル, 集団意識, 凝集性	19	8
3. 社会的性格, パーソナリティ, 動機, 意識, 態度, イメージ, 行動	60	22
4. 社会的発達, 社会化	23	2
V. 社会問題, 婦人, 老人	22	6

のうち10編が、動機・意識・態度に集中し、残りの9編が、制度、管理・運営・組織、指導、地域社会、集団、凝集性の6つの目に該当している。英論文は、社会変動に3編あるが、その他は、文化・社会成層、管理・運営・組織、マナー・規範、集団、動機・意識・態度・パーソナリティとやはり6つの目にわたっている。

和論文も英論文も、該当する目数は7で同じで

菅原⁴⁾は、表6にあるように1977年までのスポーツ社会学での内外の著書、論文について同様の分類をしている。

収集数は、全体で826、そのうち日本人研究者によるもの431である。研究領域の大項目別に多い順は、全体、日本とともに、Ⅱ、体育・スポーツ・プレイと文化、社会(全体：429、日本：212)、Ⅲ、体育・スポーツ・プレイの構造(全体：196、日本：145)、Ⅳ、体育・スポーツ・プレイの社会心理的研究(全体：112、日本：33)であり、サッカーの場合との傾向の違いがみられる。

さらに詳しく小項目別分類でみると、Ⅲの3、集団に関する論文数が全体で79、日本のもの66と非常に多く、日本の社会心理的研究論文数の2倍、Ⅳの3、パーソナリティ、動機、意識、態度に関

する日本人研究者による論文数の3倍である。菅原が、学校の運動部に関する論文を集団に分類している事情を考慮しなければならないが、Ⅳの3に該当する論文数は、日本の場合、全体の1/20と少ない。

収集数、年度、研究分野等の範囲の違いや分類基準の違いによることも考えられるが、菅原の報告と比べてもサッカーに関する研究論文においては、社会心理的研究が多いことがわかる。

4. 研究方法と調査技術

研究方法の分類については定まった考え方がないが、ここでは表7のように分類した。

表7 研究方法別分類

研究方法	和論文	数	年度	英論文	数	年度	計	年度(和英)
歴史的方法		0		a e f j	4	'67, '71, '76.	4	'67, '71, '76.
事例的	ロニヲ	3	'67, '69, '76.	c g h i	4	'66, '69, '74.	7	'66-'69, '74-'76.
統計的	ホヘトチリヌル ワカヨタレソツ	14	'69-'82	b d k m	4	'68, '71. '76, '78.	18	'68-'82
その他	イ, ハ,	2	'63, '68.	1	1	'77.	3	'63, '68, '77.

上の表は、ブラウン⁸⁾の社会調査法の3方法を引用して作製したものであるが、ブラウンとは異った分類基準を設けた。

基本的には、ある事柄を明らかにするのにどんな方法を用いているかを基準にした。統計的方法と事例的方法については、社会学辞典から次のように規定した。統計的方法とは、「集団的現象一般を反映するデータの処理方法を用いて行なう研究法⁹⁾」であり、事例的方法とは、「一つあるいは少数の社会単位(個人、集団、地域社会)の生活過程を、社会的文脈の中において詳細に記述し、それによって一般的法則を見出そうとする方法¹⁰⁾」であるとした。

しかし、ここでは、事例的方法をより拡大解釈し、事例的方法とは、様々な水準でサッカーやサッカーに関する事柄を例として、スポーツ現象や社会現象を研究する方法であるとし、次のような論文を含むものとした。①、表題に「事例的研究」とある論文、②、表題と内容から考察して、スポーツ全体を問題にしながらも、その例としてサッカーを取り上げた論文、③、ある社会的事実、理論の適用、検証の手段として、サッカーあるいはサッカーが内包する事柄を例として取り上げた論文、④、サッカーに関する社会的事実のある国を例として取り上げた論文。

事例的研究の規定に関するこれらのことから、個別スポーツ種目であるサッカーを取り上げるこ

との意義についての傾向がうかがえる。

㉑、サッカーそのものを問題にして、単に社会的な調査技術を用いた研究なのか、㉒、サッカーをスポーツ現象あるいは社会現象の中の一つの現象として捉えるような全体的システムを前提とした研究なのかという区別である。これは、研究の動機、意義、展望についての傾向であるが、明確に述べた論文は極めて少なかった。その中で、デュルケムの理論を、特定の国、特定のゲームを例にとって検証しているiの論文が㉒に属する研究であった。残りの事例的方法を用いた研究は㉑に該当する研究であった。

表7からもわかるように、統計的方法を用いた研究論文数は全体で18、和論文で14と非常に多く、発行あるいは発表年度も長期にわたっている。それに比べ、歴史的方法を用いた研究論文数は4で、和論文にはみられなかった。事例的方法を用いた研究論文数は7で、和英両論文にみられた。歴史的方法による研究、事例的方法による研究とも、年度では、1960年代の後半と1970年代の中頃にみられた。

表8は、調査技術別に論文を分類したものである。

表8. 調査技術別分類 (○は重複を示す)

調査技術	和論文	数	年度	英論文	数	年度	計	年度(和英)
観察	イ, ハ	2	'63, '68	a, l	2	'67, '77	4	'63, '67-'68, '77
質問紙	㊦, ホ, ヘ, ト, チ, リ, ヌ ル, ワ, カ, ヨ, タ, レ, ソ, ツ	15	'69-'82	㊦, d, ㊦	3	'68, '71, '78	18	'68-'82
面接	㊦, ㊦	2	'67, '69	㊦, ㊦, k, ㊦	4	'68-'69, '76-'78	6	'67-'69, '76-'78
記録的資料	ヲ	1	'76	c, e, f, g, ㊦, i, j	7	'66-'76	8	'66-'76
ソシオメトリー	㊦	1	'67		0		1	'67

和論文では、質問紙を用いた研究がもっとも多く、そのうち質問紙のみを用いた研究論文数は13であった。英論文では、記録的資料を用いた研究論文がもっとも多くあった。質問紙と面接、面接とソシオメトリー、面接と記録的資料といった調査技術の併用がみられたが、面接を用いた研究に他の技術を併用する傾向がある。また、調査技術の併用についての和英論文の比較からみると、和論文で2編、英論文で3編と、英論文の方が多かった。

調査技術が、より正確なデータを得るためのものであるならば、調査技術の併用、特に質問紙と他の調査技術の併用は、データの処理の段階において、他の調査技術から得られたデータと比較、検討ができ考察にも役立つことから必要ではなかろうか。

和論文の場合、「社会的関心の拡大と処方箋を得る¹¹⁾」という実践的、政策的な目的をもつ実態調査 (social survey) が表題からみて3編 (リ, カ,

タ)、内容からみて9編 (ニ, ホ, ヘ, ト, チ, ヌ, ヨ, ソ, ツ)、合計12編あった。これに比べて、「社会学的理論をつくり出そうとする科学研究¹²⁾」である social research はみられなかった。竹之下は social survey と social reserch に関して次のように述べている。「二つのタイプの調査のいずれも重要であるが、research の方をより重要視すべきではなかろうか。……しかしながら実証的研究の貧弱な現状においては、仮説を立てるだけでも容易でないから、そのためにだけ役立つ調査があってもよい。¹³⁾」逆に考えると、サッカーに関する社会学的研究は、実証的研究の貧弱な現状にあるといえよう。

5. 調査対象者

研究対象への approach のため調査対象者をだれにしているかについて示したのが表9である。これは、調査対象者を明確に限定できる研究論文のみについて分類したものである。

表9 調査対象者別分類 (○は重複を示す)

調査対象者	和論文	数	年度	英論文	数	年度	計	年度(和英)		
選手	プロ									
	現役			k, l	2	'76-'77	2	'76-'77		
	引退			b	1	'68	1	'68		
	アマチュア	小学生	㊦㊦㊦㊦	5	'70-'82	a	1	'67	6	'67, '70-'82
	中学生	トチ㊦㊦㊦	6	'71-'78		0		6	'71-'78	
高校生	ロ㊦㊦	3	'67, '78-'81		0		3	'63, '78-'81		
大学生・社会人	㊦ホル㊦	4	'69, '75, '81		0		4	'69, '75, '81		
指導者	ワヨレ	3	'77-'78	d	1	'71	4	'71, '77-'78		
親	㊦㊦㊦	3	'73, '78, '82		0		3	'73, '78, '82		
ファン(観客)		0		j	1	'76	1	'76		
クラブ管理者	㊦㊦	2	'68, '73	h, m	2	'73, '78	4	'68, '73, '78		

選手を調査対象にした和論文数は13、英論文数は4であったが、英論文はすべてプロ選手を調査対象にした研究であった。

プロ選手を調査対象にしたのは、イギリス、ユーゴスラビアとサッカーの盛んな国の研究者たちである。プロ選手を調査しようとする背景としては、研究者の個人的関心もあるが、アマチュア選手に比べて、社会的関連性が強く、まして、サッカー

の与える社会的影響の強い国では、より社会的関連性が明確であるということから、社会学研究上取り扱い易いのではないかと考えられる。

その他の調査対象者として、指導者、親、ファン(観客)、クラブ管理者があった。選手を取りまく間接的関与者としては、その他に、報道関係

者、大会役員、O. B. 会員、後援者、同級生などが考えられるが、調査対象者としてはなかった。

年度からみると、選手を調査対象者にした研究論文は、1960年代後半から1980年代にかけて収集範囲年度の全体にわたってみられた。指導者、親を調査対象にした研究論文は1970年代に、ファン（観客）を調査対象とした研究論文は1976年にみ

られた。間接的関与者を調査対象者にした研究論文が少ないので、はっきりとはいえないが、調査対象者として、間接的関与者は選手よりも比較の後になってあらわれてきたのではないかと推測される。

次に調査対象者と研究対象の比較からみたのが表10である。

表10 調査対象別・研究対象別分類

調査対象者	選手	指導者	ファン(観客)	クラブ・部	少年団	スクール	集団
選手	リタトチヌソbkl			ホル	ヘツ	カツ	ニ
指導者		ヨ d		ワレ			
ファン(観客)			j				
クラブ管理者				h m		リ	ニ
親					ツ	リカツ	

上の表にみられるように、研究対象と調査対象者が同一の研究論文が多い。当然ともいえるが、カ、リのようにスクールを研究対象にして、選手以外に親やクラブ管理者をも調査対象者にした研究論文もある。その他に複数の調査対象者をもつ研究論文として、ツ、ニがあったが、スクールを研究対象にした研究論文にこの傾向がめだった。またソは現役とO. B. 選手を、ヨは強いチームの指導者と弱いチームの指導者を対象者にしてい

る。

以上表10から、研究対象に対する視点が一方に偏することなく、多角的に研究対象をみるためにも、調査対象者が多様化する必要があるのではないかと考える。

6. まとめ

下の表は実態調査研究である和論文を、研究対象、領域、方法、調査技術、調査対象者からみたものである。

表11. 実態調査研究論文と各分類項目

実態調査研究論文		ニ	ホ	ヘ	ト	チ	リ	ヌ	カ	ヨ	タ	リ	ツ
研究対象	サッカークラブ・部		○										
	〃 指導者									○			
	〃 集団	○											
	〃 少年団			○									○
	〃 スクール						○		○				○
研究領域	指導者									○			
	集団	○											
研究方法	動機・意識・態度		○	○	○	○	○	○	○		○	○	○
	事例的方法	○											
調査技術	統計的		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	質問紙	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
調査対象者	面接	○											
	小学生			○			○		○		○		○
	中学生				○	○	○	○	○		○		
	高校生										○	○	
	大学生・社会人	○	○									○	
	親						○		○				○
クラブ管理者	○												
指導者										○			

研究対象は選手が多いが、スクール、少年団、クラブ・部、指導者、集団にもみられる。研究領域は動機・意識・態度の社会心理的研究、研究方法は、統計的方法、調査技術は質問紙、調査対象者は選手なかでも小中学生が多い。

概ね、選手の動機・意識・態度に関して質問紙を用い、統計的方法による実態調査であるといえる。

以上の考察をまとめたものが表12である。

表12. ま と め

考察項目	論 文	和 論 文 19編	英 論 文 13編
出 典		日本体育学会発表抄録、多い。1970年代から紀要増える。	I. R. S. S. から多い。'67-'78にかけて7編。
発行、発表年度		1963-1982	1966-1978
研究対象		選手、クラブ・部、集団が比較的多い。集団は1960年代のみ。	選手、ゲームの歴史、伝播、普及が比較的多い。
関心分野		学校体育の運動部、しかも全国大会出場校の運動部多い。	プロサッカー。
研究領域		社会心理的研究、特に動機・意識・態度に多い。	サッカーと文化・社会に多い。
研究方法		統計的方法、多い。	すべての方法に均等。日本と比べ歴史的方法の多いことが特色。
調査技術		質問紙、多い。他の技術との併用少ない。	記録的資料多い。
調査対象者		アマチュア選手、多い。複数の調査対象者をもつ研究、少ない。	プロ選手が比較的多い。
その他		実態調査が多い。特に、小、中学生対象のもの多い。	

IV. 結 論

サッカーに関する社会学的研究の動向について考察してきたのが、動向の要点をまとめると次のようにいえるであろう。

1. サッカー実践での中心的存在である選手の動機・意識・態度について質問紙を用いた社会心理的研究が、収集範囲年度の全体にわたって行なわれていた。この傾向は特に和論文に多くみられた。
2. 英論文の特色としては、サッカーと文化、社会の関連性を問題にした歴史社会学的研究が比較的多くみられたことである。
3. 和論文で、実態調査が多かったこと、調査技術、調査対象者において問題があること、研究領域が集中していることからみて、日本でのこの分野の研究は、理論構成以前の調査データを蓄積している段階にあるといえる。

参考文献

- 1) 条野豊 体育の科学, Vol. 12 : 571-574, 1962.
- 2) 丹羽劭昭 体育の科学, Vol. 12 : 575-577, 1962.
- 3) 影山健 体育の科学, Vol. 19-11 : 716-721, 1969.
- 4) 菅原礼 東京教育大学体育学部紀要, 第16巻 : 1-9, 1977.
- 5) Takenoshita, K. I.R.S.S., 2 : 179-186, 1969.
- 6) Mcpherson, B. D. I.R.S.S., 1 (10) : 55-72, 1975.
- 7) 前川・猪飼・笠井・菅原・藤田・宮下編著 『現代体育学研究法』, 大修館, 1974 : 63-66.
- 8) 日本体育学会編 『体育学研究法』体育の科学社, 1957 : 322.
- 9) 濱島, 竹内, 石川編 『社会学小辞典』有斐閣, 1981 : 統計的研究の項から
- 10) 9) に同じ, 事例的方法の項から
- 11) 9) に同じ, 社会調査の項から
- 12) 7) に同じ, p. 324
- 13) 7) に同じ, p. 325